Web 連載「研究をする」

「アカデミック研究」のお作法と「学校教育現場の研究」のお作法

「アカデミック研究」と「学校教育現場の研究」には違いがある。なぜならその目的が異なるからである。「アカデミック研究」の目的は，先陣の学術的な研究や様々な現象等を基に，再現性を確保しながら「論理的かつ客観的に」に物事を検討し，実践へのカギを明らかにすることにある。他方，「学校教育現場の研究」の目的は，優れた実践を他者が再現できるようにすることにあり，取り組まれた実践を他者がいかに具体的にイメージできるかがポイントとなっている。

そして，これらの研究を論文化するとき，「アカデミック研究」には，「アカデミック研究論文」のお作法が，「学校教育現場の研究」には，「学校教育現場の研究論文」のお作法が必然的に形づくられる。これらのお作法は一言でいうと機微な違いのように見えるが，いざ論文を書くとなるとなかなかそうはいかない。学校現場の教員であった筆者は，この違いを理解し，双方の論述を使い分けることができるようになるまで 5〜10 年の時間を要した。

「アカデミック研究論文」のお作法は，「問題」「方法」「結果」「考察」となっている。「問題」部分には，先陣の学術的な研究や様々な現象から，何か問題で，研究で何を明らかにしようとしている目的や仮説を明記する。「方法」部分には，研究目的を達成するための研究の方法を具体的に記述する。例えば，被調査者（回答者）の属性，調査方法（質問紙法・面接法等），実験装置や材料，手続きなどがある。「結果」部分には，集められたデータの分析結果を適切に記述する。例えば，データの信頼性や妥当性の検討結果，統計的処理の結果等を記述する。「考察」部分には，見いだされた結果をもとにわかったことについて論述する。このようなお作法は，日本だけのものではなく，海外の論文をみても“Introduction”,“Method”,“Results”,“Discussion”といったスタイルになっており国際的に統一されたものとなっている。

他方，「学校教育現場の研究論文」のお作法は，「アカデミック研究」論文のお作法のように標準的なスタイルはないが，一定の類似した傾向がある。例えば，ある地方公共団体の教育研究員等の報告書をみると，多くの研究は「研究主題・主題設定の理由」「研究内容と方法」「実践の概要」「成果と課題」といったスタイルを基本に論述されている。「研究主題・主題設定の理由」部分には，学習指導要領や過去の経験や教育実践，自校の研究主題，育てたい生徒像との関連から，試みた研究実践等，主題を設定した理由が明記されている。「研究内容と方法」部分には，試みた授業実践に関する内容，教材の工夫等が記述されている。「実践の概要」部分には，当該実践の単元，生徒の実態，研究構想図や実施した実践内容，学習指導案などが記述されている。「成果と課題」については，アンケート結果等をもとに当該の研究で得られた成果．今後の課題などが記述されている。

このように「アカデミック研究論文」と「学校教育現場の研究論文」は，その目的から研究における守備範囲に違いがあり，お作法にも相違が認められるのである。

ところで，研究には様々な分類方法がある。その中で最もスタンダードな分類が昭和 42 年版科学技術白書－科学技術と経済社会－（科学技術庁(編),1967)に示された「基礎研究」「応用研究」「開発研究」である。「基礎研究」とは，仮説や理論形成を図ったり，現象や事実に関して新しい知識を得るために行われる理論的又は実験的研究のことである。「応用研究」とは，「基礎研究」によって明らかになった知識を実践化し課題改善を図るために行う研究のことである。「開発研究」とは，「基礎研究」や「応用研究」等から得られた知識を利用し，新しい材料や装置，製品，システム，教材等を開発する研究のことである。その他，「理論研究」「実証研究」「実験研究」「文献研究」「実践研究」等，その分類方法は多種多様である。

これらの研究のうち，日本キャリア教育学会の原著論文に多く見られるのが「実証研究」と「実践研究」である。「実証研究」とは，明らかにしたい事象等について，調査・分析した結果を実証的に読み解き検討した研究であり，「実践研究」は，教育実践の効果等について，調査・分析した結果を実証的に読み解き検討した研究である。これらは両者ともに「アカデミック研究」に分類される研究である。

それでは，「学校教育現場の研究論文」は，これらのどの研究に分類されるのであろうか。「学校教育現場の研究論文」の多くは「実践報告」の形態をとっており，「実践研究」とは言えないものが多いのが事実である。しかしながら，「学校教育現場の研究論文」には，多くの素晴らしい実践が報告されており，これらの実践を実証的に検討し「実践研究」としていくことは，これからの教育を検討する上で意味深いものがある。一方，「学校教育現場の研究論文」には，優れた実践を他者が再現できるようにするといった守備範囲があることを考えると，そのすべてを「実践研究」とする必要はない。

『理論なき実践は盲目であり，実践なき理論は空虚である』という Kurt Lewin の言葉を常に脳裏におき，研究者と実践者がそれぞれの守備範囲を認め合いながら，これからのキャリア教育研究を展開していく必要があると考える。

（上越教育大学　山田智之）